

洛友會報

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛 友 会

人生を語る

(終戦直後の京大導く)

洛友会会長 鳥養利三郎

日本敗戦の日、混乱と虚脱が列島をおおっていた。

文部省は「戦時中の書類と研究報告を焼却せよ」といい、京大では総長名で「授業は即時休止して学生を家庭へ帰すよう」との通達が出された。戦時中だったので、八月といえども夏休みはなかったのである。

ところが、当時工学部教授だった鳥養さんは、書類も焼かず、授業も研究も平常通り進めて行ったのだ。京大はもろろんだが、全国の大学を通じて、これは鳥養研究室だけだったかも知れない。まずそのころをご本人に話っていたらどう。

「いつ、いかなる時でも、平常心を失わず、研究と授業が整然と行われているのが大学というところだ。学問の自由、大学の自治という貴重な権利も、またここから生れてくるのである。だから遺憾

ながら、あの時の文部省や総長の通達には賛成しかねたのだ。そこでどんなことが起っても、私が全責任を負うからと、私が関係していた三つの研究所と電気工学科の研究員、学生、職員に、平常通りの仕事をやらせてもらった。講義も研究日程も、きめていた通り続けて行った。たとえば玉音放送の三日後の十八日にも研究報告討議を開いた。海軍大阪事務所長の森住中将が特別の資格でいつも出席していたが、その日も現われた。淡々とした顔で傍聴しているの、私は戦争に負けたのに、えらい静かな軍人だなと思っていたが、中将は九月二日に突然自決した。すでに覚悟していたんだな、印象に残る人だった」

そして鳥養さんは「実は私も進駐軍の出方次第で、まかり間違えば死ぬ覚悟と用意はしていた」と笑った。

その鳥養さんが、その年の十一月一日付で、京大総長に選ばれたのである。そして二期六年、戦後のあの教育大革命の中で、東大の南原繁総長と共に苦勞して行くのである。

鳥養さんは明治二十年二月八日徳島県、今の鳴門市大麻町に生れた。香川県との境で、低い山を一つ越えた向うの香川県三本松に南原繁氏が生れている。奥境の小さな山をへだてて、東西両大学総長が戦後の時期を同じくして出ているのは面白い。

徳島中学（現城南高校）から三高、京大に学んだ。「はじめから学者になるつもりは、別になかったが、大学に残れと言われてからその気になった」のだそうだ。

学者としての専門は電気工学、電気の過渡現象の研究は広く知られ、外国の学会からも賞をえており、高周波焼入れ法の研究は、応用化されてわが国の産業界を一変させたほどの功績だ。新幹線の枕木（まくらぎ）なども、鳥養さんの焼入れ法が実用化されたもの。学士院会員、ユネスコ国内委員長をつとめたこともある。

敗戦時から六年間の京大総長時代に、鳥養さんの真価は遺憾なく発揮された。それは政治のおひざ元にある東大の南原さんのように派手な話題こそなかったが、いか

にも京大の伝統にふさわしく、地味でシンの通った、それだけに苦闘の年月であったようだ。

学内では占領軍によるパーシブレットで三十余人の教官の追放、滝川幸辰教授らの復帰から法学、経済両学部への再建、三高を合わせた新制大学への移行、学生運動はスタートし、京大看護婦事件から総長カン詰め事件に発展する。一方アメリカのきびしい教育占領政策との板ばさみ——内外ともに新しく敷かれる日本の教育軌道への混乱期を、鳥養さんはあの小柄な満身に、気骨とスジをみながら、さばっていた。

「今の教授や学生を見ていると老人の冷や水といわれるかも知れないが——」と前置きして、鳥養さんはいう。

「私の専門の電気工学の分野を例にとってみても、コンピュータやエレクトロニクスが若い学者の関心を集めている。それはそれ

本年は、青柳栄司先生が亡くなられてから（昭和十九年八月二十二日御逝去）二十五回忌に当る。大東亜戦争の戦局、漸く我れに不利になって、物資・食糧なども甚だ乏しくなって来た時分であっ

でまことに結構なことだが、あたかもそれが万能のように考えて、みんながそれに集って行く傾向は困る。発電、送電、それを動かす、多量に安く提供して国力を増す、という方向も重要な研究なのである大学としては常に研究のバランスを考え、流行ばかり追ってはいけない。人文科学についてもそう言えるのではないか。つまり近ごろの学者は一般に地道な基礎的な研究のつみ重ねをもっと深めて行くことに欠けているような気がする。劣少なくして功の多い、目の先スタンドプレーをねらっているようだが、これではいけない。

教授が自分の研究に自信と権威を持たぬから、勉強しようと思ってきた学生にバカにされる。今の学生運動の原因は、いくつかあろうが、私は教授たちが自分の研究の不勉強から、学生の不信感を深めていることにも、大きな原因があると見ている」——。

青柳先生の二十五回忌

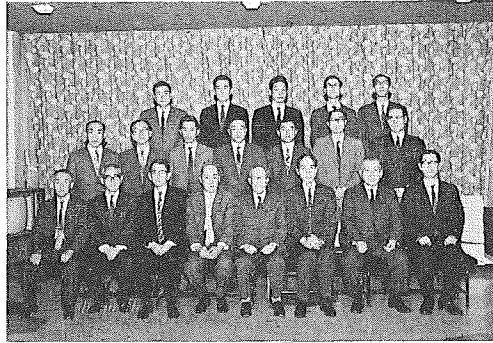
京大名譽教授 松田長三郎

だが、必勝を信じておられた先生が、悲惨な敗戦を知らずに逝去せられたことは、寧ろおしあわせであったかと拝察する。爾來敗戦、戦後の幾多の苦難の途を乗り越えて、我国は、今や世界も驚く程

济的成長を遂げ、国民総生産は、米國に次いで世界第二位という輝やかしい発展を遂げ、国内・国外事情も、他國に比較すると比較的安定していることは、慶ばしいことであるが、一方精神的支柱を失った現在、殊に昨今の各大学の紛争における一部学生の常軌を逸した行動は、最早師弟の關係ではなく、斯かる学園は教育の場とは云い難い。殊に東京大学の現状は全く臨然たらざるを得ぬ。我國隨一の大学であるだけに、その解決方法は今後の我國大学の在り方に長く甚大な影響を及ぼすものと思われる。誠に國家の深憂であり情誼地を払った斯かる現状を、先生には如何に御覧になるであらうか。

先生は明治三十一年七月、東京帝國大学を御卒業後、直ちに、創立の京都帝國大学に赴任せられ、昭和八年停年退官せられるまで、実に三十有五年間、終始一貫、大学における教育・研究に尽瘁せられ、幾多の卒業生を世に送られた。学生定員の劃期的増員を断行し、或は、法科系学生と、理工科系学生数の比率が7対3であるのを逆にすべきであると云われ、「口の人たるより、手の人たれ」と説かれた。また、大学の本務以外、例えば教育・研究・発表機關として、電気評論、電気工学講習

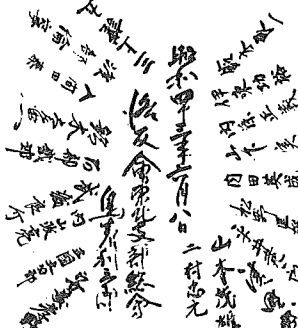
所（現在の立命館大学理工工部の前身）、財団法人青柳研究所（現在の応用科学研究所）等の創刊・創設など、時流に先んじて、卓抜な構想を創見・実施せられた。至誠の人、信念の人、実行実践の人であられた。又、禁酒禁煙を実行し、人にも契められたが、これは寧ろ、その習慣に染まっていな



青年に対する心遣いであられたと察する。先生御退官の記念祝賀会は、京都市公会堂で開催されたが、先生の御趣旨に副って、水で乾杯したと記憶する。講義のあいまいには（時には講義をよそにして）、或は常識の涵養（エチケット）、発明工夫、科学的研磨、情操教育、宗教的信念等々、時宜に適した標語を掲げて、時には声演

共に下る垂訓であり、卒業生の感銘深い想い出となっている、人を信じ、人を愛し、清濁併せ呑んで神明の加護を信じ、私心無く、陰徳を積まれた。先生に直接教養を受けた者には、先生のご精神は長く生き給うのである。

御夫人もご老体を静かに養っておられ、令嗣青柳健次博士は、大



阪大学電気科教授として先生の遺髪を継ぎ、御令孫達も夫々、ご立派に成人されておられることはお目出度いことである。茲に先生を偲び感謝を捧げるとともに、御冥福をお祈りする次第である。

第3回東北支部総会

第3回東北支部総会は、初夏とは思えぬ強い日差しの中、仙台電気会館において、6月8日開催されました。

今回は本部より鳥養、山本、清野三先生をお迎えし、支部会員としては平井支部長、内田副支部長

をはじめ、青森、岩手、秋田、福島などの遠隔地から多数の参加もあり合計17名と支部会員の過半数のご出席を得て盛況裡に議事が進められ本部総会報告、支部会費値上げ、支部役員改選等を決定して総会はとどこおりなく終了し、次いで清野先生より「計算機技術と計算センターの動向」と題する講話が行なわれ、最近の最も進歩の目ぐるましい電子計算機の発達と人間性の問題について啓蒙される点が多く、出席者一同大いに感激いたしました。

引き続き懇親会に移り、最近の世界技術の進歩や故人となられた諸先輩の懐旧談に夜の更けるのも忘れ名残りを惜しみつつ散会いたしました。

新役員

- 顧問 荒井源三郎 (大4)
- 支部長 平井寛一郎 (大15)
- 副支部長 内田 英成 (昭9)
- 評議員 中村 喜一 (大13)
- 同 進藤 陽吉 (昭6)
- 同 山下 実 (和7)
- 同(幹事) 二村 忠元 (昭15)
- 同 鈴木太左衛門 (昭15)
- 同(幹事) 内山 政亮 (昭19)
- 同 阿部 鉄郎 (昭21)
- 同(幹事) 三上 謹五 (昭21)
- 同 松野 匡雄 (昭27)
- 同 伊藤 功裕 (昭27)
- 同(幹事) 武藤 良介 (昭28)

中部支部総会

中部支部総会は、6月13日名古屋市八勝館において開催した。

本部より鳥養会長、上之園教授山本幹事を迎え、支部は本多支部長はじめ多数出席し中華料理に舌つみをうちつつ種々歓談した。

新役員

- 顧問 小田島修三 (明45)
- 支部長 本多 静雄
- 副支部長 田中 卓次 (大15)
- 評議員 河津吉兵衛 (大13)
- 同 河合 次男 (昭5)
- 同 宇野 茂道 (昭6)
- 同 古田 久一 (昭6)
- 同 川端 太郎 (昭8)
- 同 高尾 馨夫 (昭8)
- 同 大杉 幹 (昭12)
- 同 川合 幸彦 (昭19)
- 同 横田 収 (昭19)
- 同 伊藤 定昌 (昭20)
- 同 佐藤 彰洋 (昭22)
- 同 水野 勝己 (昭20)
- 同 鈴木 哲夫 (昭25)
- 同 鶴木 惠雅 (昭26)
- 同 横川 京次 (昭28)
- 同 水本 巖 (昭28)
- 同 地主 利男 (昭29)
- 同 山崎 泰助 (昭29)
- 同 中村 修三 (昭32)
- 同 松本 嘉佑 (昭35)
- 同 永田 芳男 (昭37)

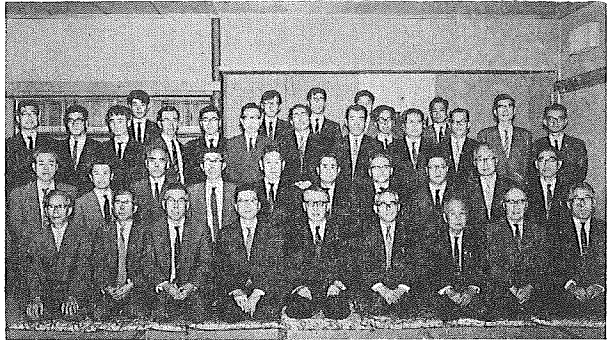
四国支部総会

第13回洛友会四国支部総会は、6月15日(土)高松市紅羽におい

て開催した。本部からは林(千博)教授、坂井教授、山本幹事をお迎えした。当日は空梅雨模様のみし暑い日であったが、教室関係会員75名中34名の出席という最大記録となった。中でも黒田氏(昭11)は四国の総会を懐しんで、はるばる大阪より出席された。

総会に先立ち宮地支部長より幕末の土佐の絵師金蔵(通称絵金)の華麗で力感あふれる芝居絵のスクリーンを一時間余り披露され一同興味深く鑑賞した。

総会は支部長挨拶、業務報告のあと林教授から鳥養会長の文化功労章受章の経緯から始まって教室の近況を興味深く話され、山本幹



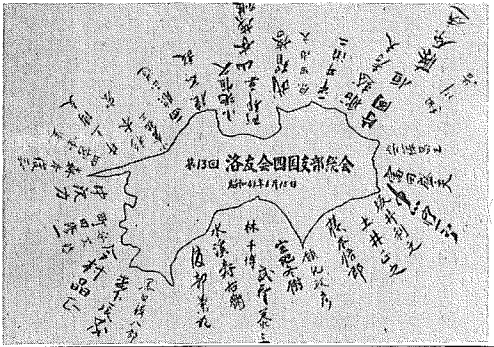
事から本部の会務について報告があった。

つづいて懇親会に移り宴たけなわになるにつれ酒席は諸々方々に車座となり先、後輩のへだてを忘れ談論風発、酒杯応酬の楽しい一宵を過ごした。(幹事船越孝夫記)

中国支部総会

中国電力技術研究会にご出席のため来広された林重憲先生ならびに山本本部幹事をお迎えて6月23日午後6時から広島市「あまぎ」において昭和43年度洛友会中国支部総会を開催した。

日頃久しくお会い出来ない各地方の会員のご来会もあって会するもの29名、真田支部長の挨拶に始まり昭和42年度、43年度決算なら



びに予算報告、中国支部ニュースの紹介、昭和43年度支部役員改選等の議事が進められ林先生から教室の近況報告、山本幹事より本部総会や洛友会の近況懐かしくお話し、引き続き懇親会に移った。

「あまぎ」の主人の好意で今回特に趣向をかえて和洋折衷の会場に京都情緒をとり入れた扇のかざり日傘、赤毛せんの床机の中で美ぼうのホステスのサービス、広島的美酒に酔い、宴たけなわとなるとやわらかなエレクトーンの奏でる中でダンスや自慢のかくし芸などつづき披露され和気あいあいの雰囲気の中盛會裡に会を閉じた

◆出席者 山本幹事 佐川重雄(大14) 木本正夫(昭2) 真田安夫(昭2) 高橋親雄(昭4) 添田貫一郎(昭6) 潮見公安(昭8) 佐々木毅一(昭12) 角井勉(昭15) 井上武(昭16) 松谷健一郎(昭16) 小川清(昭22) 門野内忠幸(昭23) 伊藤薫(昭24) 浴厚夫(昭25) 野中清文(昭26) 仁木可也(昭27) 片山敏夫(昭28) 新小刀一晃(昭28) 村尾久(昭34) 印丸佐七夫(昭35) 牧征滋(昭38) 高木健起(昭43) 日山三三(講大9) 安藤房吉(講昭3) 徳原平蔵(講昭3) 三田徳平(講昭7) 高橋広市(講昭14) (門野内記)

日森君に相談したところ、早くしてくれ、自分は近々大阪に帰ることになる模様だと。元氣な森君が東京を去られることは誠に淋しいが、とに角急にまよって今日だと、いう訳で送別会を兼ねての懇親会となった。皆元氣で若い。定年なんて糞喰い!! 青年ですわ。(古池記)

田安夫(昭2) 高橋親雄(昭4) 添田貫一郎(昭6) 潮見公安(昭8) 佐々木毅一(昭12) 角井勉(昭15) 井上武(昭16) 松谷健一郎(昭16) 小川清(昭22) 門野内忠幸(昭23) 伊藤薫(昭24) 浴厚夫(昭25) 野中清文(昭26) 仁木可也(昭27) 片山敏夫(昭28) 新小刀一晃(昭28) 村尾久(昭34) 印丸佐七夫(昭35) 牧征滋(昭38) 高木健起(昭43) 日山三三(講大9) 安藤房吉(講昭3) 徳原平蔵(講昭3) 三田徳平(講昭7) 高橋広市(講昭14) (門野内記)

新役員

支部長 真田 安夫(昭2)
幹事 木村 一男(大15)
同 高橋 親雄(昭4)
同 竹内 貞美(昭7)
同 潮見 公安(昭8)
同 天野 宗明(昭10)

洛友会総会にはこの中の三人が出席した。そこで季節もそろそろビールの美味しい時期となったので一つ集まるうかと話が出て、翌々

昭和十一年

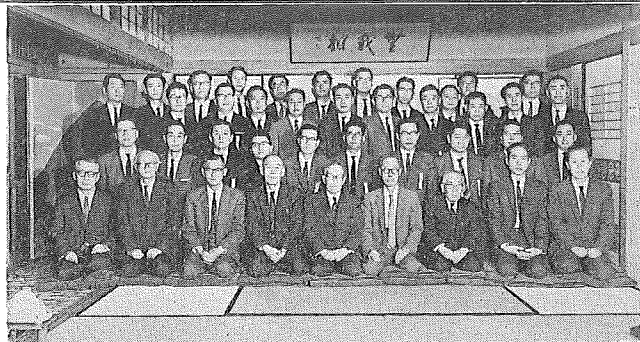
東京昭士会

古賀 七郎(昭15)
松谷健一郎(昭16)
井上 武(昭16)
姫井 豊治(昭19)
門野内忠幸(昭23)
仁木 可也(昭27)
藤村 巖(講大11)
三田徳平(講昭11)

卒業二十周年記念アルバム作る

昭和二十二年会クラス会

電気教室で終戦を迎え、戦後の混乱期に果立った我々にも卒業後二十年の歳月が流れた。食糧難、社会不安、インフレの渦まく社会に飛び出した我々には、卒業記念アルバムなど思いもよらなかつた。そこで昭和41年暮れより二十周年記念行事の一つとしてクラスメンバーの家写真真集を兼ねた卒業記念アルバムを作成することを計画し、昨春秋の二十周年記念クラス会の



スナップも入れて今夏漸く出来上がった。

何しろ当時の面影を出来るだけ伝えたいというので、お米やお芋と物々交換してやっとなり入れたフィルムで憲兵の目を気にしながら撮った写真のネガの中から抜き出し、ノート引換券や米軍のまいた降伏宣伝ビラまで入れ、先生方の写真は古いアルバムの中から若かりし頃の写真を借用した。それに我々の家族写真を集めて並べ、二年越しに完成した次第。

二十周年記念クラス会は昨年10月14日全国より三十数名が電気工学教室に集まり盛大に開催された夕刻より会場を東山山麓栗田山荘に移し、鳥養先生を始めお世話になった先生方多数のご出席を頂いて終戦時の思い出話や戦後の苦しかった学生生活、社会に出てからのことなど話はずみず、それに祇園のきれいだころの余興も一層賑やかさを盛り立てて楽しい一夕を過ごした。

次回は昭和22年卒にちなんで卒業二十周年記念コンパを昭和44年秋50サイクル地区で開催しようという提案を満場一致可決して幕を閉じた。

写真は左より(前列)林(千)先生、林(重)先生、羽村先生、松田先生、鳥養先生、岡本先生、阿部先生、清野先生、大谷先生(二列目)坂井安間、松岡、塚本、平井、小杉、小泉、吉山、船越、中島、(三四列目)奥田、岡崎、橋本、柴田、増田、池上、坂元、井上、山本、信沢、松本、大貫、高木、岩崎、出口、清水、兼松、湯浅、園山、木村、外山 (高木俊宜記)

昭二会例会

昭和二年京大工学部電気科を卒業した同級会は、五年毎に会合していたが、昨四十二年第八回の例会のとき、誰言うもなく五年毎というのは永すぎるから年一度ということにしたらと言ひ出し、全員反対する者なく賛成成立したのは御互に先の短かくなつたのを自覚したためかと、早速四十三年度の会合の具体策を計ったが「黒四」見学、幹事は内田兄と決定した。幹事の計画で六月八日松本に集合黒四ホテル一泊、九日黒四ダム、発電所見学、宇奈月迄下ってホテル黒部で宴会、翌十日富山で解散ときまり会するもの十五名、家族四名計十九名の一行となつた。九日は黒部には珍らしく快晴にめぐまれ関西電力の御好意により「ホテル黒四」からマイクロバスを用

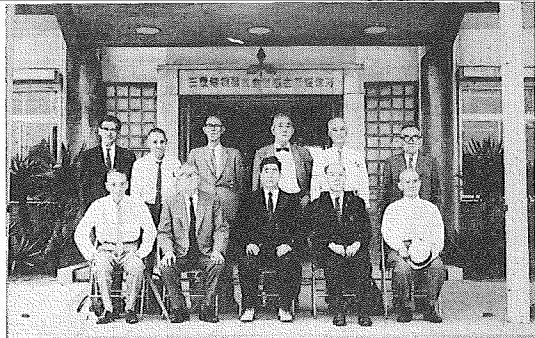
昭二会(四三六九)

林(千)先生
林(重)先生
羽村先生
松田先生
鳥養先生
岡本先生
阿部先生
清野先生
大谷先生
坂井安間
松岡先生
塚本先生
平井先生
小杉先生
小泉先生
吉山先生
船越先生
中島先生
奥田先生
岡崎先生
橋本先生
柴田先生
増田先生
池上先生
坂元先生
井上先生
山本先生
信沢先生
松本先生
大貫先生
高木先生
岩崎先生
出口先生
清水先生
兼松先生
湯浅先生
園山先生
木村先生
外山先生
高木俊宜記

びだし十時過ぎにお開き各自の室にひき上げたが其後不明。十日は昨日の快晴にひきかえ小雨、遠近の山のかすむ中で鶯、時鳥、カツコ、其の他名を知らぬ小鳥の合唱の一時は都会では得られない初夏の景物であった。日曜にかかわらず出勤して御世話下さった関西電力の方々の御好意に感謝し、幹事の内田兄の労に感謝して来年は四国方面というのに期待しながら散会した。(N生記)

信友会集會

信友会は、大正六年及七年卒業生の同級会であるが、随時集って旧交を温めている。本年度に入つてからは、四月六日明石で、五月十七、十八日は浜松・浜名湖で、八月五、六日は名古屋・岐阜で、夫々集會を持った。八月五日は三菱電機名古屋製作所を見学、高桑所長初め各位に大変お世話になりました。(写真はその節の記念撮影)。昼食の饗応を受け、岐阜まで送って頂いた。途中、明治村を見て、長良川ホテルに投宿、同夜は有名な長良川の鵜飼を觀賞、一同歡を尽した。「おもしろうてやがてかなしき鵜飼かな」。賑やかな舟中の酒宴もすみ鵜飼もすむと一抹の淋しさが標う。盛夏といえど、涼しい川風に吹かれ、中天に



澄む月を仰ぐと、静かに「螢の光」のメロデーが流れて来る。誠に和洋折衷の印象的な夏の夜ではあった。翌日は青葉山に登り、岐阜城を見て懐古の詩情を満喫した。毎回十名近い参加者が東京及京阪からあって楽しい集会をもてることは、この上無い喜びである。

尚、毎週火曜正午には、京阪電車、天満橋松坂屋7階の食堂で都合のつく人は集っているが、毎回数人の参加者があり、歓談楽しんでいる。(松田長三郎記)

電講納涼懇談会

京都在住の会員で

電気工学講習所卒業生の世話係

として常に献身的な努力をして頂いている大先輩、シンコーメタリコン会長立石亨三氏(大正五卒)と日本電機商会主白坂勇城氏(大正一卒)両氏のおつせんで、京都在住の一部で電話連絡によって簡単に集る事の出来た者が、急に思いついて無計画的に集り、一夜納涼の懇談会を開いたが、その時誠に突然のお伺いを立てた所、幸にも御都合をつけて頂いた林重憲先生、近藤文治先生、辻藤吉先生、山本茂雄先生方の御列席も得て、愈々盛んな会合となり、愉快な一夜を懐旧談に花を咲かせた。何分昭和十五年卒業を限りとして此の洛友会の籍に入れて貰っているの

で、後記の様に社会的には花盛りの活躍をして居るメンバー揃いではあるが、卒業後実社会での活躍年数の平均値を勘定して見たら此の出席者で四〇、一年となった。意気愈々盛んで、再びこの様な機会を拓けて行く事を期し、併せて先生方の御健康を祈って解散した

時 昭和四十三年七月廿五日

処 京都大丸前 大江戸

出席者

林 重憲 先生 近藤文治 先生
辻 藤吉 先生 山本茂雄 先生
立石亨三(大5) 水原経祐(大6)
望月 章(大6) 藤原 篤(大7)
越坂延夫(大10) 白坂勇城(大11)
谷口久一(大12) 八木徳三(大12)

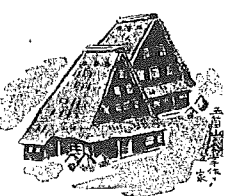
会員近況

森 芳郎(大14)山崎惣三郎(大14)
井上嘉三(昭3) 北野山人(昭4)
星野一夫(昭9) 岩本国三(昭11)
藤村俊一(昭11) 山口敬二(昭11)
木村広美(昭12)市川亀久弥(昭13)
市川盛治(昭13) 小山正三(昭15)

電気工学講習所
同窓会世話係
1968.7.25
於 京都
大江戸
山本茂雄
辻藤吉
井上嘉三
木村広美
市川盛治
市川亀久弥
山口敬二
岩本国三
北野山人
森 芳郎

洛友会会員中から左の二氏が日本学術会議全国区会員候補として立候補されました。

青柳 健次 (昭6電工科卒)
前田 憲一 (昭7電工科卒)



編集後記

◎鳥養会長が朝日新聞7月21日に「人生を語る」をのせられ本会報に転載することを快諾頂きました。終戦直後と現在の大学行政を比べ時代の変遷を痛感する次第です。

◎本号は各支部総会や同窓会の記事、写真、寄せ書き等をのせました。支部活動の隆盛を祈り、今後どしどし原稿をご送付願います。特に洛友会発展のため若い世代の方々のご投稿を期待します。

◎本年度より会費を値上げすることになりました。諸物価騰貴の折

教室だより

大学院の入学試験も終って教室の内外も秋色を増して来ました。今年の大学院受験者は修士課程に百三十二名(内、他大学四十九名、外国人留学生(ベトナム)一名、博士課程十五名(他大学一名)で、そのうち合格内定者は修士課程六十四名(他大学より十三名)博士課程十四名であります。今年

柄出来るだけ抑制したいと検討しましたが已むを得ませんでした。現在会費納入率が六〇%以下となつて居りますが、会員各位の御理解により向上に御協力下さいませ。様御願ひ致します。

◎本年度の会員名簿は出来るだけ年賀状に間に合はず様目下鋭意編集中です。

電話番号の変更、郵便番号等既に御通知を頂いたものは訂正しましたが、今後其正確な勤務先、住所を御通知願ひします。

尚、電話番号の後の「内」は内線番号を表わし、「〒」は郵便番号を表わします。(幹事山本記)

しで、先輩各位の築き上げられた伝統の御蔭をもちまして第一次就職希望者は七月始めには百%内定し、目下第二次就職希望者(修士課程に進学出来なかつた者)の推薦の選考を行なつて居ります。

この第二次就職希望者三十三名に対する求人八十社以上に及び十月初旬にはすべて内定出来るものと予想されます。

は修士課程の競争率が遂に二倍を突破しました。さらに又、修士課程の合格内定者が六十人を超えたことも教室始まって以来始めてのことです。

就職関係は今年も好調の滑り出

今年の傾向としましては、計算機とくにソフトウェア関係に希望が集中したことが挙げられます。

(教室主任記)

× × × × × × × ×

電気総合雑誌

月刊

電気評論

毎月
10日発売

B5判 本文100頁 定価250円

ご購入料 1カ年 前金概算 3,350円

京都大学電気工学科教室から発行されていた「電気評論」が、新たに会社組織になり、月刊誌として昨年来発行してまいりましたが、この11月で満一年を迎えることになりました。

これも偏えに洛友会の皆さまの暖かいご支援の賜ものと感謝致しております。

今後とも、皆さまのご協力を得て、充実した電気総合雑誌としてまい進していきたいと思っております。

まだ、ご購入なさっていないお方は、座右の銘としてぜひともお申し込みを賜りますようお願い申し上げます。

10月号内容予告

<定価250円>

☆明治100年電力史特集☆

☆統計で見る電気事業

1. 電気の総需要
2. 一人当たり年発電電力量
3. 家庭用電力需要
4. 電力需要
5. 発電所出力
6. 水火力別発電電力量
7. 水力発電所数および出力
8. 水力発電電力量
9. 包蔵水力
10. 水車発電機単機容量
11. 火力発電所数および出力
12. 火力発電電力量

13. 火力発電所用燃料
14. 火力機器の容量
15. 火力機器の汽温・汽圧
16. 変電所数および出力
17. 送電線こう長
18. 送電電圧
19. 配電線
20. 電気事業者数
21. 電気事業者従業員数
22. 資本金
23. 電気料金

☆明治100年年譜

その他一般論文・シリーズ(家庭電化・原子力発電)・マンスリー・基礎講座など

—10月10日発行—

株式会社 電気評論社

本社 京都市左京区田中大堰町49番地

(財団法人 応用科学研究所内)

電話 京都 (075) 701-2582

振替 京都 9906番

郵便番号 606

スタッフ

- | | | |
|-------|-------|----------|
| 取締役社長 | 松田長三郎 | (大正6年卒) |
| 常務取締役 | 的場俊一 | (昭和13年卒) |
| 取締役 | 林重憲 | (昭和2年卒) |
| " | 巽良知 | (大正13年卒) |
| " | 和田昌博 | (昭和7年卒) |
| 監査役 | 前田藤治 | (昭和16年卒) |